

■米国でAIを口実とした大リストラ＝人員削減の動き

——いま私たちが立ち向かうべき資本の主役はビッグテックとレント資本だ——

2025 年 11 月 10 日

阿部治正

●相次ぐ解雇

先週の『日経』が次のように報じています。「米国企業のリストラが相次いでいる。民間統計によると、2025 年 1～9 月の人員削減数は前年同期比5割増の約95万人に拡大した。米景気や失業統計はまだ悪化傾向を示していないものの、大企業は人工知能(AI)による効率化を先取りする形で人員を削減し、「雇用なき成長」に向け動き出した」。

マイクロソフトなどのようにAIによるプログラミングの自動化が背景になっている例もありますが、多くはAI導入がもたらす効果を予測した、あるいはAIを口実とした人員削減のようです。

日本でも良く知られている米国企業の人員削減の規模は、国際物流の UPS48,000 人、国際金融機関のシティグループ 20,000 人、マイクロソフト 15,000 人、アマゾン・ドット・コム14,000人、コンサルティング企業アクセンチュア 10,000 人等々です。

同じ『日経』の記事には「米国で『ブルーカラービリオネア』」現象AI 発展で潤う肉体労働者」という記事が掲載された。自動車機械工、溶接工、配管工、冷暖房空調整備技師等々の技能工への需要が高まり、報酬も上がっているそうです。

AIを口実にリストラされるホワイトカラーはもちろん、今は人手不足で人気が高まっている技能工も、「ファイアー」の一声で解雇されるのが常の米国では、決して安泰ではいられないことを確認する必要があります。

●資本の世界の新たな覇権者＝レント資本

もうひとつ私たちが確認しておかなければならないのは、ITやAIの実装が進み、それがビジネスの在り方、つまり大企業が富を取得し利益を得る方法自体が大きく変化するという点です。それは、労働者や市民が資本と闘う場合の相手である資本自体が大きく姿を変えてしまうということでもあります。資本主義が、資本主義という土台の上ではあれ、労働者から搾取し、社会から収奪をする方法を大きく変化させる、ある種の構造変化を遂げるという事なのです。

これが、世に資本の「レント資本化」と言われている事態です。現代において、労働者市民が資本

と闘うという場合、その資本の主勢力はIT・AI資本群であり、さらにその頂点にいて、覇権を握っているのはプラットフォーム資本＝レント資本です。ですから、IT・AI資本とともにレント資本とは何か、その利益取得、搾取と収奪の方法がどのようなものかを知らずして、労働者の労働と生活を守ることはできません。ましてや、くらしと仕事を守る闘いを通して、さらにその先の社会構造の変革をめざすことも叶いません。従って、以下に、当面必要な範囲において、レント資本について見ておくことにします。

現在の資本の中で覇権を握っているのはGAFAM(グーグル、アマゾン、フェイスブック、アップル、マイクロソフト)など、ITやAIを活用したプラットフォームという物質的基盤を持ち、そのネットワーク効果による強い市場支配力を持つ資本です。これら資本は、検索、SNS、クラウド、OSなどにおける独占・寡占を実現しています。データの囲い込みでユーザーの行動データを排他的に蓄積します。さらにロックイン効果、一度参加したら離脱困難なネットワーク構造で囲い込み、課金の自動化・継続性を広告、サブスクリプション、クラウド課金を実現しています。

●レント資本の収奪・搾取構造

「レント」とは、本来的には土地のような自然物や独占的に利用できる資源へのアクセスに対する支払い、あるいは鉄道などに見られた自然独占を根拠にした使用料・利用料を意味しました。これがデジタル経済の時代に拡張されて、現代ではプラットフォームのような、資本あるいは労働によって再生産が困難な資源への独占的アクセスから得られる、持続的・非競争的な利潤と解されています。

ここで重要なことは、プラットフォーム資本が得ているレントは、従来のような生産部面での労働者からの剰余労働の直接的搾取ではないことです。プラットフォーム資本は、生産資本や商業資本やその下で働く労働者から搾り取った剰余価値の、さらにその上前を撥ねることで資本としてのレントを得ています。あるいは、自らが商業資本、金融資本の機能の一部を吸収し、そして生産過程にも介入しつつ、生産資本とは最も遠いところにありながら、社会の富を広範に収奪し、収益を長期化、最大化している資本です。だからこそ、レント資本の覇権の下で、格差と貧困は拡大深化する一方なのです。

●レント資本の覇権も永遠ではない

このレント資本の覇権は、これまでのところ極めて強力であるように見えます。レント資本は強い支配力とともに柔軟性を持っています。しかしその存在は、万能でも永遠でもありません。資本主義的な経済規定の必然として生じたこの最新の資本形態も、資本主義の根本的な矛盾を

まぬかれることはできません。現在すでにレント資本の重要な技術的基盤であり、その下請け的役割をになっているオープンAIやエヌビディアなど知的テック資本の世界では、資本の時価評価が高すぎると指摘され、テック資本間の「循環投資」の危険性が公然と指摘されています。レント資本の盟友であり、重要な手足でもあるテック産業自身の将来にわたる収益確保は不安視され、すでに金融資本の運動によって上下左右に揺さぶられ、「AIバブル」さえが取りざたされている状況は、GAFAMなどレント資本にとっても他人ごとではあり得ないのです。

●レント資本とテック諸資本による労働者への犠牲転嫁

私たちが見なければならないのは、こうしたプラットフォーム企業・レント資本の成長発展がそしてその動揺が、労働者に及ぼす影響です。これらの新しい資本形態は、今日の商業資本にも金融資本にも、そして生産資本の現場の労働にも大きな変化をもたらしています。ネットワーク労働、クラウド労働が普及し、技能労働も知識労働も含めてギグワーク化やフリーランス化が急速に広がり、また消費者が商行為としての自覚なく行っているデータ提供、コンテンツ提供等々までさえ、自らの収益構造の中に内面化しています。レント資本の運命は、それらのすべてに深刻な影響を及ぼします。

現在起きているIT・AI企業による大リストラの波は、レント資本の独特の運動から生じて来ています。巨大テック企業は、自らの「循環投資」がもたらす不安、バブル崩壊などが取りざたされる状況を見て、また強大なAI投資を賄う必要を理由にして、その他様々な口実を設けて、労働者への犠牲の転嫁を図って来るでしょう。自らの負担を労働者に転化するという動機だけでなく、労働強化や賃下げなど労働条件の引下げ、あるいは資本による労働者への統制権の強化等々を目的にして、様々な犠牲を強要してくるでしょう。

その影響は、冒頭で上げた巨大テック企業の正社員だけでなく、レント資本が覇権を握る経済の下で働くギグワーカーやフリーランスを含む様々な労働者、サーバーインフラの設計・運用、スタートアップのIT開発者、コールセンター、倉庫・物流・配達労働者等々への犠牲の押し付けが常態化してくる可能性もあります。

●闘いの方向と内容

どのような闘いが求められているでしょうか。

まずは、労働の搾取に依存していないかに見えるレント資本の下にも厳然と存在する労働の可視化が必要です。レント資本は、生産資本や商業資本とは別個の存在でありながらも、それらの機能を部分的に抱え込むことによって、それ自身の内部にも生産的労働と剰余価値の搾取の要素を内在させています。事実、コールセンター、倉庫・物流・配達労働者等々の集团的組織的

な労働の現場があります。

次に、いわゆる非物質的労働、デジタル労働の社会的労働としての確認と、そこでの労働者の要求の可視化が必要です。レント資本の下でも、サーバーインフラの設計・運用、研究開発（R&D）、AI 学習・言語処理・ソフトウェア開発等々に関わる労働とその担い手がいます。その社会的労働としての明確化と、担い手たちの労働者としての自己組織化が必要です。

さらには、レントの源泉であるプラットフォームとそれが産み出すネットワークを、社会に再帰属させるための闘い、社会的共有化、コモンズ化の闘いが必要です。これは、土地の共同化、鉄道・電力・水道・通信など自然独占の共同化と類似の課題です。そこにおける労働の協働化、協働する労働者とコミュニティの手にプラットフォームを掌握させるための闘いです。レント資本が支配する経済の下で苦しむ人々、労働者の願いや要求を積み上げ、横に広げ、その蓄積された社会的力によってプラットフォームを掌握しコントロールする。この目標の下にレント資本との闘いを発展させましょう。